

性犯罪対策課が、色々な権限を与えられているとは言え、基本的な仕事は犯罪の防止です。そのために、性犯罪が起こりやすい夜間のパトロールが主な仕事となります。私はほぼ毎晩、治安の悪い繁華街をパトロールしています。いくら治安が悪いと言っても、婦人警官の制服を着ている私に手を出すバカは居ませんから、たまに違う服装でパトロールしたりもします。

【理奈】「さて、今日もパトロールに行かなきゃ」

午後9時から翌朝6時までが主な勤務時間です。

出勤した私は制服に着替えますが、制服は当然ミニスカートで、下着はつけません。いざと言う時にセックスしやすくするためです。

私はそんな格好で夜の繁華街のパトロールへと繰り出しました。



【通行人】「おっ。婦警さんこんばんは。今日もパトロール？」

【理奈】「はい。何かありましたらいつでも連絡して下さいね。」

【通行人】「いつもの婦警さんだ」
【通行人】「あの足めちやめちや綺麗だよなあ……」

私は毎晩のようにこの町をパトロールしているので、

町で商売をしている人達や、その常連客の間で有名になりました。

町の人たちが私を見ると、目立つ金髪と短いスカートに目を奪われるようで、

視線が私に集中している事を嫌でも感じてしまい、興奮してしまいます。

任務で性行為をした翌日などならいいのですが、そうでないと子宮が疼いて仕事になりません。

そんな時、私は子宮の疼きを治めるために、こっそりと公衆トイレに入ります。



DOWNTOWN STREET



DOWNTOWN STREET

フリー麻雀くん

サンプラス



私は繁華街の一角にある小さな公園の、薄汚れたトイレに入りました。

【理奈】「んっ…誰もいない」

ここでは浮浪者が寝ている事があるのですが、今日は誰も居ません。
私は男子トイレに入り、掃除用具入れを覗き込みます。

【理奈】「ぶぶっ…相変わらず汚いトイレプランね」

私はトイレプランを手に取り、いつも通りそれでオナニーしようと思いましたが、その脇においてある小さな箱を見つけ、いつもと違うオナニーをしようと考え、その箱を手にとり、トイレの個室へと入りました。





私が個室に入ると、ツンとしたアンモニア臭と、男性の排泄物の匂いがします。回々に掃除が行き届いていないトイレで、便器には大便がこびりついていました。

【理奈】「これを綺麗にするのも、

私の義務よね……」

私は掃除道具入れから持ってきたブラシで、軽く便器をこすって排泄物を落とします。便器が綺麗になる変わりに、トイレブラシにべつとりと排泄物がこびりつきました。

【理奈】「さて、まずはいつも通りっ……」

私のはいているパンストには、股間の部分だけ大きく開くように加工が施してあります。私はそこを大きく開き、さらに膣口を開いて、ブラシの先端を接近させました。



【理奈】「んんっ……ああああっっっ……♡」

私がブラシを持つ手に力を込めると、ウンチが付着し、ぬめったブラシが、膣肉を掻き分けながら入り込んでいきます。

【理奈】「んんっ……♡ やっぱりブラシは気持ちいいわねっ……♡」

スポンジブラシが適度に膣壁と子宮内部を擦り上げ、こびりついたウンチが塗りこまれていく感触は、他の異物では絶対に味わえない感覚です。私は膣内をゆっくりかき回してブラシの味を堪能した後、下腹部の力を抜き、さらにブラシを胎内深くへと押し込んでいきました。



【理奈】「んんっ……ああああっっっ……♡」

私がブラシを持つ手に力を込めると、
ウンチが付着し、ぬめったブラシが、
膣肉を掻き分けながら入り込んでいきます。

【理奈】「んんっ……♡ やっぱりブラシは
気持ちいいわねっ……♡」

スポンジブラシが適度に膣壁と子宮内部を擦り上げ、
こびりついたウンチが塗りこまれていく感触は、
他の異物では絶対に味わえない感覚です。
私は膣内をゆっくりかき回してブラシの味を堪能した後、
下腹部の力を抜き、さらにブラシを胎内深くへと押し込んでいきました。



【理奈】「ひんぷんっ……あああああうっっっ♡」

ぬるんっ……とした感触と同時に、

弾力のある子宮口を突きぬけ、

ブランの先端が子宮内部に食い込みました。

あの日以来、私の子宮内は性感帯になり、

ここに異物を入れる事が癖になりました。

汚物で汚れたトイレブランで子宮を犯し、

子宮内部をウンチまみれにしているというだけで、

その事実だけでイッちゃってしまいます。

【理奈】「で、でもっ……今日はこれでイッちゃダメっ……」

私はそのままかき回したくなる気持ちを抑えて、しほんぷんっからブランを引き抜きました。





【理奈】「はあっ…はあっ…んんっ…♡」

私はブランについていたウンチを
こぼさないよう、膣を締め付けながら、
ゆっくるとブランを引き抜きました。

【理奈】「ふふっ…綺麗になってる♡」

ブランに付着していた汚れはすっかり綺麗になり、
私の子宮液をしみ込ませ、ぬらぬらと光っていました。

【理奈】「それじゃ、ここからが本番ねっ…♡」

そして私はブランを置き、掃除道具入れにあった小さな箱を取り出しました。



